

白金 茂



SHIROGANE YOSHI



藤田良範 (亥 78 歳)



尾崎昇 (寅 78 歳)



徳原房代



増田陽一

延び延びと猫のまねして円か哉 (申 93 歳)
 オリオンやダイヤモンドを眼で結ぶ (高志)
 億年のひかり放てり寒昴 (璃子 亥 103 歳)
 年女生きてるだけで○もうけ (百合子 午 83 歳)
 賀状来る写楽に言はすおめでとう (みち)
 クマに噛まれず転倒もせず孤り酒 (陽一 午 95 歳)



初詣 午年 83 歳 高志



初詣 午年 83 歳 みち



尉鶲 (俳文❶)

初鴉腥なまぐさき ものをもて饗きょうし
 海に岩あれば初日の岩よりす
 田作りを噛む間も地球自転なす
 モノクロの世界寂しき夢はじめ

璃子 (穴まどひ平 21) 高志選
 // (//) //
 // (//) // みち選
 // (//) //

定例句会（二月の兼題…）

（）

初場所は話題豊富でワクワクす

佐々木由紀子

二月二十日（金）アビスター第五会議室
三月二十日（金）アビスター第三会議室
四月十八日（金）アビスター第三会議室
一月句会（²⁶ / 1 / 19 兼題…新年一般）太字は当日句
12 / 12 / 15 15 15

光成高志

元旦や鳩一羽来てこちら向く

十一面観音像に初参り

初筑波くつきり見えてめでたけれ

丑寅にあはれ満月ある三日

満月に木星侍る三日宵

光みち

金色の屠蘇こそめでた舌の上

初筑波二峰尖つてむらさきに

賀状来る馬の足跡四つ付け

玄関の靴整然と三が日

雪少し積り三日の夜明けかな

浅野正美

山尾万世遊
尾崎昇

初春や目覚め手合せありがとう
元旦やカーテン開けて日を拝む
元旦や元気に起きて顔洗ふ
初春や神や仏に願い事
お雑煮や感謝の気持ち伝えけり

山尾万世遊

レコードのジャズ聴く一日松過ぎて

都鳥かくも集めし隅田川

一棟の団地抜け来て初詣

ぱかぱかと日差すホームの年始め

松過ぎと見えぬ人出の浅草寺

尾崎昇

年玉や昔の我に帰りをり

陽光で新聞読むや冬の蠅

夜冷えて布団の重さ身に応え

奥山の餌なき熊や人襲ふ

里山や枯野に残る獸道

171号選句一覧 ○字は選者の頭文字。

黒塗りは特選

正の山里山や枯野に残る獸道

枯野を駆け巡るのは熊ならぬ猪でしょうか。獸道として残っている

初茜何か良い事ありそな
成願寺頂くお神酒初詣
初神籤それぞれの吉結びけり
初景色ダイヤモンド富士湖面にも

のを発見したのです。遠く苗穂の夢に通底していると思います。

のレコードのジャズ聴く一日松過ぎて

正の元旦や鳩一羽来てこちら向く

の初茜何か良い事ありそうな

初春や目覚め手合せありがとう

金色の蜃鯨こそめでた舌の上

読み初めに図書館行きて知を深め

年玉や昔の我に帰りをり

正都鳥かくも集めし隅田川

正元旦やカーテン開けて日を拝む

正初筑波一峰尖つてむらさきに

十一面観音像に初参り

成願寺頂くお神酒初詣

正初場所や取り直しに沸く声援

正陽光で新聞読むや冬の蠅

高一棟の団地抜け来て初詣

元旦や元気に起きて顔洗ふ

の初神籤それぞれの吉結びけり

はや寒九ウエブサイトにアップせる

毎初筑波くつきり見えてめでたけれ

正高賀状来る馬の足跡四つ付け

印象に残る賀状だったのでしよう。こちらも想像するのが愉しい。

虎落笛止みそつもなく暮なづむ

夜冷えて布団の重さ身に心え

毎ばかりと日差すホームの年始め

初春や神や仏に願い事

正初景色ダイヤモンド富士湖面にも

正寅にあはれ満月ある二日

正玄関の靴整然と二が日

正月を迎えるにあたって靴置き場などきれいに掃除をされたことが

でしよう。靴が整然と並べられている様子が想像されます。

毎の満月に木星待る二日宵

待るがいい表現いいなし思います。

雪少し積り二日の夜明けかな

初場所は話題豊富でワクワクす

毎お雑煮や感謝の気持ち伝えけり

毎松過ぎと見えぬ人出の浅草寺

奥山の餌なき熊や人襲ふ

俳空評論纂

飛鳥路 三三三 龜井勝一郎 を再度読んで以前の思いが
浅薄であつたことに気づいたのでここにもう一度思うところを書いてみる。飛鳥路はすべて墓場だ。この一文からはじまる氏の歩いた地の感想が書かれてある。なぜか私も飛鳥には気が魅かれてもう前にもう六〇代に京都から訪ねて自転車で日星をつけた場所を見て回ったことがあつて氏の文章が一々合点がいき、一気に読んだ。しかしながら、私が見た所を古代の歴史から解釈しているので半ば観光で

回ったのと訳がちがうのである。その要約を書きつつ書評を書いてみよう。（その前に氏の文章が高一に載っていたのを思い出したので再読した。「わたくしは文学をいかに学んできたか」という題にて、学生教養新書から採った文章である。これを紹介する方が第一だと思うのでそちらを要約する。氏は明治40年函館に生まれた。私の母と同じ年である。そのころの日本文学界は藤村・花袋・白鳥らの自然主義作家が活躍を始め、一方には漱石や鷗外たちも作品を発表し明治文学の花開くころであったが、氏の環境ではそれへの関心を呼び起すようなものは何もなかった。平凡な少年としてたいてて読書もせずに、のんびりと暮らしていたのである。しかし氏の街・函館は日本で一番古い開港場の一つで、異国情緒が漂っていて、各国の領事館があり、外国船の往来も多く、アメリカ人・イギリス人・ロシア人・中国人たちも多く住んでいた。氏の家は異邦人の居留地の跡にあって、教会も多く、フランス・ロシア・イギリスの教会があり、家の裏側には聖ペテロ女学院などがある。そういう雰囲気の中に家があった。そういう場所が氏の小中時代の遊び場であり、幼稚園・日曜学校、その派の教会へ通っていた。宣教師や牧師から聞く「バイブル」の話が唯一の知恵の泉だった。多くの文学者が皆少年のころから文学書に読みふけつたよう書かれてあるが、氏にはそういう経験はない。巖谷小波の童話・立川文庫の豆本の中の「猿飛佐助」とか「木戸黄門」など、子供向きの講談を三読んだ記憶があるが、まとまつた文学書はなに一つ手に取つた記憶はない。しかし今振り返つてみて、自分の感性を養つてくれたものがあつたとすればそれは故郷の自然ではなかつたかと思われる。函館は津軽海峡に面した港町である。立待岬に立てば石川啄木の碑がある。日本海と太平洋をつなぐ紺碧の潮流が激しく流れいくのが見える。その向こうに津軽の山々や下北半島がかすんで見える。こんな調子で氏の文章

を紹介していたら飛鳥路が書けなくなつてしまつが、もう少し辛抱あれ。函館の郊外の湯の川温泉、女子トラピスト修道院のことや夕暮れの波止場の鷗や日没の風景を思い出し、札幌のピューリタリズム・小樽のリアリズムに比して函館のロマンティシズムと呼んでみたが、こうした風景が氏の文学心を知らず知らずのうちに育てたのかもしれない。文学と云えば何よりもまず小説を読むことがあげられるが、それも当然ではあるけれど、自然と風景の影響は、思いのほか、われわれの心に「文学」を植え付けるのではなかろうか。それははつきりと結果を捕え難いものだが、われわれはもつと自然をたいたせつにし、自然を眺める目を養うべきと思う。もつとも少年のわたくしは、その点でも無自覚であつたが、今となつては、やはり故郷の自然の影響を思わずにはいられない。それとも、これは望郷の念というものかもしれない。郷愁かもしれない。以下には高等学校に入つて以後の文学遍歴が書かれてある。当初ゲーテ・ハイネを読み、人生と自然と美を学んだ。ファウストの鷗外訳が載せられて、ここに青春を呼び覚ます声を聞いた。聖書とゲーテの「対話」という最大の書物に接したのは感謝すべきことであった。今一つ氏に大きな影響を与えたのは、ゲーテの「イタリア紀行」である。これはゲーテみずからがこの古典の地を求めて歩いた紀行で、氏もじうかして一度はギリシヤやイタリアへ旅行して、古代ローマやルネサンスの跡をたどつてみたいと空想した。青年時代の烈しい夢であった。しかし簡単に海外旅行のできるはずはなかつた。ただこのことが動機となつて、学校を出てから日本の古典の地へ目を向けるようになった。「イタリア紀行」に学びながら日本の古典の地たる大和の旅へ上るようになつたが、これは、やはり一つの大きな収穫であつた。氏は大和の古寺を巡り、「万葉集」や「日本書紀」を愛読した。日本の古典に深くはいろいろと思つた。ゲーテも無論大切だが、自國の古典・歴史・伝統に無知なこ

とを恥と思つた。ちょうどゲーテが古代ギリシャやイタリアのルネサンスに深く学んだように、氏はその点で、日本において同様のことを試みよう、ゲーテを模倣したわけである。一個の旅人としてかなり空想的に古典の地を歩いたわけであるが、それでも単に読書だけではなく、実際にその地を歩いたことは、氏に古典への興味を深くいだかせたのである。大和の古寺を訪れたのは昭和十二年ころであつたが、それから十数年間私は暇さえあれば、春秋には必ずそこへ旅するようになつた。そして古寺を巡つてゐるうちに、単に美術的鑑賞だけでは満足できず、しだいに仏教に心傾けるようになった云々。氏はその後法隆寺の成立した飛鳥時代に興味をいだくとともに、聖徳太子に心から尊敬の念をもつようになつて、「聖書」から「対話」へと移つた氏は今度はさまざまな經文を読むようになり、わけても親鸞の教えに接したことは生涯において一大事であつたと思つて、いると回想されている。仏教徒として生きるようになつた。青年期から壮年期へかけての激しい時代に直面して、心の動搖はやまず、迷いに迷つたあげくの再生の祈りも強く作用して、聖徳太子から親鸞に至るその流れをいくたびも学ぼうと努めてきたのである。文学だけを学んだわけではなく、さまざまの意味で教えを受けた先輩をあげるならば、キリスト信徒としての内村鑑三、東洋美術の岡倉天心、作家としての島崎藤村、武者小路実篤・倉田百二・岡本かな子といった人たちに心傾けてきた。他にもひろく読むが、自分として、今まで多くの肖像を描いた人と云えども以上のような人たちである。多

方面にいろいろなものを摸取してきた。文学を学ぶということは人生を学ぶことであり、人生いかに生くべきかを問うことであり、その意味は決して単純ではないが、この問いは忘れまいと思つて、現代はいうまでもなく、日本とつて大変な苦難の時代である。こういう時代には、過去のものは美しくもましくも見えるものである。しかし、過去の芸術家も宗教人も、やはりその時代の苦悩はまとめて背負つて生きてきたわけで、時代苦や人生苦を味わう点では変わらなかつたであろう。人一倍感じやすい人々にとって、楽な環境などあるはずはない。どんな時代、どんな環境に恵まれても、与えられただけのものには不満を感じ、それに抵抗し、孤独において仕事を残したのである。以上殆ど氏の文章をコピペした。私は龜井勝一郎の文章には魅かれていた。今読み返してみて、高三の秋に倉田百二の「出家とその弟子」・「愛と認識との出発」を読んで耽溺し、受験勉強どころではないほど読みふけた。氏の文章に励起され、これ以上書き進めるのは脱線々々止まります。冒頭の題名の文章は氏の著書を検索すれば出て読めますので、敢えて紹介するのを止めます。ただ、石舞台古墳を見て、こんな巨石を運ばせた蘇我馬子という人は日本人ではなかつたのではないかという思いが消せなかつた。蘇我入鹿の首塚を見て、当時の飛鳥が決して和やわらぎを以つて尊しとなく、聖徳太子の憲法の心ではなかつたとの思いを強くした。

先月に続き宣長の物のははれ論を宣長自身の言うところを書く。小林秀雄の著書でもカタカナでの原文で書いてあるので、読みやすいように我流で訳して左にしめす。「恋せば 人の心も なからまし 物のははれも これよりぞ知る」という俊成の有名な歌につき、或る人が宣長に、この「ははれ」と言うのは如何なる義かと訊ねた。質問者は、語をつづけ、「物のははれを知るが、即ち人の心のある也、物のははれを知らぬが、即ち人の心のなきなれば、人の情のあらぬなしは、只物のははれを知ると知らぬにてございますから、このははれは、常にただ、ははれとばかり心得えるばかりにては、詮無くないのでは」と言つた。(これは宣長自身が質問者になつて答えた自作自演の文) 宣長曰く、「私は、心には解つたようになりますが、ふと答える言葉がない、やや思い巡らせば、いよいよははれと云う言葉には、意味深きように思われ、一言二言にして、たやすくむかえらるべくもなければ、重ねて申すべしと答えぬ、さてその人の去つた後にて、よくよく思い巡らせば、いよいよははれの言は、たやすく思るべき事にあらず、古い書又は古歌などに使える様をざつと思ひ見るに、大方その義多くして、一かた二かたに使うのみにあらず、さて、かれこれ古き書共を考え

て見て、なお深く調べれば、大方歌道は、ははれの一言より外に、余義なし、神代より今に至り、末世無窮に及ぶまで、詠み出でる所の和歌皆、ははれの一言に帰す、さればこの道の極意を尋ねるに、又ははれの一言より外なし、伊勢物語源氏物語その外あらゆる物語までも、又その本意をたづねれば、ははれの一言にて、これを蔽うべし、孔子の詩三百一言以蔽之曰ク思無レ邪とのたまえるも、今ここに思いあわすれば、似たる事也」(「安波礼弁あわねのべん」)。この「安波礼弁」は、宝暦八年(宣長29歳)になつた稿本である。小林秀雄の宣長論は延々とつづくのであるが、その講演録からやさしく解釈すると、貫之は物のははれという言葉は歌人の言葉であつて「舵取り、もののははれを知らで」と書いたように歌人の特権意識のものであつた。それはけしからん、誰にでもある、使える言葉であると拡げたのが宣長である。宣長は源氏物語を読んで開眼したのである。「すべての人の心」というものは、漢文の書物に書いてあるように、一トかたに、つきぢりなる物にはあらず、深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだくだしく、めゝしく、みだれあひて、さだまりがたく、さまざまのくまおほかる物なるを、此物語には、さるくだくだしきくまぐまで、のこるかたなく、いともくはしく、こまかに書あらはしたる

こと、くもりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくにて、大かた人の情ヨロのあるやうを書るさまは、やまと、もろこし、いにしへ、今、ゆくさきも、くらべるべきふみにあらじとぞおぼゆる。してみると、彼の開眼とは、「源氏」が、人の心を「くもりなき鏡にうつして、むかひたらむ」が如くに見えたという事だつた。「おほかた人のまことの情といふ物は、女童めのわらはの「ことく、みれんに、おろかなる物也、男らしく、きつとして、かしこきは、実の情にはあらず、それはうはべをつくろひ、かざりたる物也、実の心のそこを、さぐりてみれば、いかほどかしこき人も、みな女童にかかる事なし、それをはぢて、つゝむとつゝまぬとのたがひめ計ばかり也（「紫文要領」卷下）。ここにきて私は、我に返り氣付いた。式部の物語を少しばかり読んで源氏に敷衍しようと思つても私には無理、思ひ上りりだと。本居宣長のもののはれ論だつてそう。正直に書いて、おくのはそ道に帰ろう。そもそもそこに出で来る二人の人物の解釈をしようと思つて物のはれを知つた人と決めつけて、恐れもせずに小林秀雄の本居宣長を再読して深みに嵌つたのだ。聞いた話であるが、文学部大学院で源氏をテーマに論文を書くと大体博士に成れるとか、源氏の研究は現代でも課題であつて、おそらく永遠の課題であろうと思う。そういう

う式部の大作を今までああでもない、こうでもないと注釈書が山ほどあるのだし、それを一寸宣長の源氏論に触れたからと言つて論文が書けるわけではない。まして小林秀雄の宣長論だつて相当難しく思えるのに。我が身を振り返つて忸怩たる思いだと偉そうにここに書いたつて始まらない。只俳人になつて芭蕉の心がちらつと見える瞬間があるのが嬉しくてここまで書いて来ただけです。まだ道半ばなのでこのまま進みます。物のあはれ論は棚上げしていつになるかわかりませんが、保留にしておきます。

俳文広場

① ジョウビタキ尉鶴この冬初めて、ジョウビタキの鳴き声を耳にしました。十一月中旬よく晴れた朝の庭、小鳥の気配を感じてあればもしかしてら・と目をこらす。ツツジの木の間をチヨンチヨンと懸命に飛び回つている。枝に止まり頭を前傾させ同時に黒いシッポを上下に振りながら鳴いているではないか。独特の高い声でピュルリ・・ピュウ・・ピュウ・・ピピピッと繰り返し誘うように呼びかけてくる。とても人懐っこい鳥だ。やはりジョウビタキだ。今年もこの庭に来てくれた。鳴き声に合わせてチツチツチツと応えると鳴き返してくれる。可愛くて親しみを感じる。しばらくするとどこかへ飛んでゆくが又同じ場所へ戻つて鳴く。お帰り

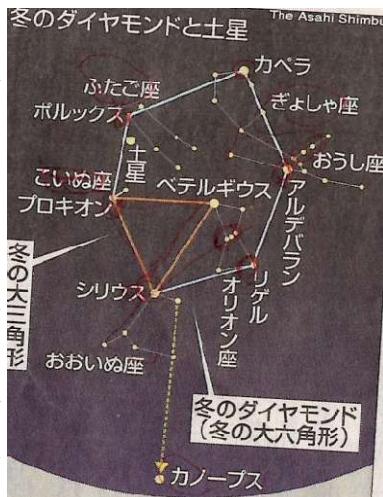
と応える。何となく寄り添つてくれているようで嬉しくなる。草を引く手も軽くなる。ジョウビタキは越冬をするため、たつた一羽でこの辺りを縄張りにして一冬を過ごすようだ。頭のてっぺんはグレー顔は黒胴体は橙色、シッポと羽は黒で羽には白い斑点が左右一ヶずつある。橙色と黒のコントラストがとてもきれいで目を引く。今年も会えたとカレンダーに日付を記しておこう。今ジョウビタキが止まっているツツジは四年前にこの庭を造る時、池の樹木と共に植えた。大きく育ち庭の中央で毎年ピンク色の花をこんもりと盛大に咲かせ楽しませてくれた。三年前に亡くなつた夫も大切にし趣味の俳句の中でよく詠んでいたものだ。それが今年の猛暑と水不足で二つに分かれていた根株の片側が枯れてしまつた。気を付けて水やりしたつもりだが丸い形のまだ艶のある葉が次々と落ちていく。十一月の剪定で庭師さんに半分の木を切つてもらつた。施肥消毒剪定落葉掃きとかなり手がかかる。年を重ねると共に作業の負担を感じるようになつてきた。だが、樹木があるかぎり手入れしなければ荒れてしまう。それは見るに忍びない。今まで季節ごとの庭のうつろいを充分に楽しませてもらつたからなあ、小鳥たちのさえずりにしつかり癒されているよね。何よりあの落葉を早く掃き清めて自分の気持ちをすつきりさせ

たいから、“やる元気が出ている”というのが一番理屈かな。リハビリにもなるかもね。あれこれ思いを巡らせながら草を引く。暖かい小春日の中でこちらの気を引くようにジョウビタキが又ピュルリピュウ！と鳴きだした。縮こまつた気持ちをほぐしてくれる。暖かくなる四月中頃までは居てくれるだろう。今の自分の出来る範囲で無理しないで庭の事も受け入れなくては・ほっこりした気分で思いを変えてみた。夫の愛したこじんまりと苔むした庭、私にとつても長年手入れしてきた落ち着ける場所である。移りゆく自然現象も又、人の心情もあれこれまとめて”すべてを承ります”と気持ちを新たにしている（11.26廣本幸恵）。

②スコップ鳴らしの姫 忘れ得ぬ人がいる。富士川の桜蝦干場で出会つた姫のことである。広い河川敷の桜蝦干場に暇そな姫がぼつんと居た。話しかけてみると「私の仕事は鳥を追い払うことだ」と言つて、すぐに実演してみせてくれた。河口の方から百合鳴の群れがじわじわと筵に近づき出すと、姫はスコップを逆さに持ち鉄の部分に石ころを打ちつけ、カンカンと鳴らす。同時に「ホーイホーイ」と言いながら駆けていくと百合鳴はすぐ飛び立つていく。五、六回繰り返してくれた。一緒に大笑いした。姫の屈託ない笑顔、あつけらかんとした態度に強い印象を受けた。しかし、私には「山椒大夫」の最後の場面と重なつたり、

また、淋しさにまた銅鑼打つや鹿火屋寺（原石鼎）に通ずるスコップ鳴らしと思う。再会したいが、まだ果たしていない（3名古屋）。

3 冬の星



今の中天に見られる星座に私は毎年のように感動する。右のスキャンした図を見て下さい。冬の季語になつてゐるオリオン座は冬の大ダイヤモンド別名冬の大六角形の中にはつぱり取り込まれてゐます。シリウスとこいぬ座のプロキオン、そしてオリオン座の赤いペルギウスを結ぶ冬の大三角形もその中に含まれます。図ではふたご座に土星が見えて いますが、今はつまり今年の二〇二六年の今は木星が大きく見えて います。惑星の名前の通り惑う星ですから年によつて

位置が変わります。図は二〇〇五年一月末のものです。私は昔平成元年8.16富士山に登りました。御来光の前に雲海の果てに大きな星が見えてくるが、間を置くと三つの星が垂直にあがつてくる。オリオンの三つ星である。オリオンの四角形をみるとことなく日光の中に消えた。三つ星を大きく見た最初であった。初冬の宵、東の黒き下総台地からあの三つ星が直にせりあがつてくるのを見た。地平の拡大現象で中天に上つた時より二倍も大きく見えるのだ。オリオンのせりあがるのを見ると冬の到来を思う。オリオンの上る前は御車座の五角形が中天にあり、双子座の長方形が続く。オリオンが高く上ると子犬座、大犬座が見えて来て、所謂冬の大三角となる。オリオンを囲む星々の一等星を辿つていくと、オリオンのリゲル、大犬座のシリウス、子犬座のプロキオン、双子座のポルツクス、御車座のカペラ、牡牛座のアルデバランであり、これらの星を結んでみると、それぞれ赤星、黄星、青星であり、絢爛たるダイヤモンドのようである。星の密集する昴、釣鐘星が牡牛座に茫と見え、オリオンの涙のような大青雲が見える。この天上風景を眺め、何億光年という宇宙の果てに思いを馳せ、そして物の中の分子原子中性子という小宇宙に思いを詰めていく。その途方もない時空の想像に酔つて眠る。(1.13光成高志)。(私が星座に目

覚めたのは小六になつた長女が夜空をみてお父さんあれはペテルギウスよあれはアルデバランよと言つた。私はそういう星の名は知らなかつた。驚いてこれはいかんと思つたのが最初。それから五年くらい経つて山口誓子の「天狼」に入った。天狼とはシリウスの中国名である。その後誓子に「星恋」という句集がある事を知つてすぐ求め何回も読んだ。今も中央公論社で買える。そのPRに「天文学者・野尻抱影、戦後の俳句界を牽引した俳人・山口誓子。星を愛し、星座の動きに子どものように心躍らせる一人が、天空を眺めながら交わしあつた隨想と俳句を収める。」とある名著である。私は芭蕉を愛して今も書いているが、芭蕉には星の句はある荒海や佐渡によつたふ天の川ぐらいしかない。それを補完するのがこの誓子の星恋と思つています。）

お便り広場

光成様いつもありがとうございます。「白金霞」170号18部をお納め致します。本年も大変お世話になりありがとうございます。年末まではもう難しいです。また来年もお手伝いできることがあることありますたく存じます。よいお年をお迎えくださいませ。（^{12.2}木戸敦子）。明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。今年は七周目の午年良い年になりますように。

白金霞十一月号お送り頂きありがとうございました。年末本棚を整理していく「アビコから九段坂へ」の本を久しぶりに手にしました。懐かしく読んでいます。でもどの経路でこの本棚にあるのか定かではありません。同窓会の時に

頂いたのかなど思いを巡らせていました。大変な経験をされましたね。光成さんのお人柄が一杯詰まつていて温かみがありゆつくり読ませて頂いています。現在お体は大丈夫ですか。今回も自己流の年相応の発想になつてしましました。でも今の気持ちを表現出来たかなと心の中のシミを吐き出しました。書いた後はとてもすつきりします。拙いけれどこのように文字にする機会を頂いてありがとうございます。手・指も少々痛みを感じるようになつてきてしまつております。どうぞ本年もよろしくお願ひ致します（令和八年一月廣本幸恵）。（幸恵さんの達筆の手紙読んでキーボードで入力しています。手指には軽く叩いて書けるので楽ですよ。是非ワープロとかパソコン入力を検討下さい。今はやりのスマホも便利です。これからのことを考えるとおすすめします。高志 まだ生きているのもなかく大変です。白金霞ますくの「発展、お一方の健康」多幸を！！（7 瑞子）。昨年も「白金霞」をお送り下さり有難うございました。変わらぬ熱意に励されます。今年も元気で転ばぬように過しましょ（^{1.9}百合子）。正月TV放映のダイヤモンド富士にパワーをもらいました。健康に留意して過ごそうと思つております今年もよろしくお願いいたします（^{1.11}正美）。「白金霞」毎月お送り頂きありがとうございました。ご無沙汰しております。昨年十月下旬から病院通いが続き生活のリズムがくるつてしまいまし

我孫子日記

	12/19
*	句会
	12/28
*2	正
	1/1
*3	初詣
	1/10
*4	駅前クリニック
	1/11
*5	あわんとり
	1/16
	句会・駅前ク

略) (1.14 三浦省五)。

た。しばらく医師の指導に従つていこうと思ひます。十二月に琴平に帰省してきました。姉弟三家族が揃い父の一周忌法要を行いました。とても暖かい日和で父と母が見守つてくれているのかなという思いで胸がいっぱいになります。故郷は気持ちが穏やかになりいいところです。(以下略) (1.7 朋子)。二〇二六年おめでとうございます。今日はもう十二日です。何かぼんやりと正月を過ぎました。気力も行動力も弱くなり静かな正月が良くなりました。雑煮だけは作つてたべました。母が作つていたように餅をゆがいて汁をかける私たちが子供の頃から食べてた雑煮です。主人の方は汁の中へ餅を入れての雑煮でしたが、私が作るのは私流です。兄が元気な時は自分で作つた糯米で私達はもちろん子孫曾孫まで集まつて十二月三十日は一日がかりでペッタンくと餅つきをしたものです。(以下略) (1.14 幸子)。謹んで新年のご挨拶申しあげます。年賀状をいただき誠に有難うございました。感謝いたします。今年も頑張ります。私は今年で 84 歳、広大を退職して 20 年になります。(以下略) (1.14 三浦省五)。

編集後記

一月は行く二月は逃げる三月は去るの俗謡があるようには、早や一月は行つてしまつ。年末から年の初めの生活が皆季語になつていて、句は沢山出来そうに思うが、それはいきません。気に止めて作句しないと俗事に紛れ消えてしまう。さて、しかしながら先月から

*冬紅葉子らと話して楽しけれ
た。故郷は気持ちが穏やかになりいいところです。(以下略) (1.7 朋子)。二〇二六年おめでとうございます。今日はもう十二日です。何かぼんやりと正月を過ぎました。気力も行動力も弱くなり静かな正月が良くなりました。雑煮だけは作つてたべました。母が作つていたように餅をゆがいて汁をかける私たちが子供の頃から食べてた雑煮です。主人の方は汁の中へ餅を入れての雑煮でしたが、私が作るのは私流です。兄が元気な時は自分で作つた糯米で私達はもちろん子孫曾孫まで集まつて十二月三十日は一日がかりでペッタンくと餅つきをしたものです。(以下略) (1.14 幸子)。謹んで新年のご挨拶申しあげます。年賀状をいただき誠に有難うございました。感謝いたします。今年も頑張ります。私は今年で 84 歳、広大を退職して 20 年になります。(以下略) (1.14 三浦省五)。

*冬紅葉子らと話して楽しけれ
*2 枯穂田きら／光る朝かな
*3 沼渡り隣の町へ初詣 (みち)
六地蔵様にも初参り

初筑波つくば麓の町へ通ひし頃

初景色空より青く沼長く (みち)

初詣人気なき寺猫現るゝ (リ)

元旦や小松菜畑に猫車 (リ)

正一位伏見稻荷大明神へ初詣

初鴉人声で鳴く手賀城跡

切干の大笊三つ干されあり

育苗箱に半紙を敷いて初賽錢

*4 寒晴や白きマンション映えてをり

手賀川の白のかたまり瘤白鳥

寒鮎釣りの車連なる用水路

*5 あわんとり中止になつて酒飲むと
鳥総松この強風に傾ぎたり

畏友広谷さんのお蔭で本誌をウェブサイトにあげることが出来た。創刊時からの俳誌が閲覧できるようになつた。印刷製本を依頼している木戸敦子さんの真似ができたということ。手に持つて読める冊子はそれなりに便利だが、昔のものは本箱から取り出さなくてはならない。当たり前な事なんだが、それがパソコン前では面倒に感じられるほど世の中が変わってしまった。何事も速く速くなっている。歩いているのが車に乗つたり果ては飛行機に乗つて移動するみたいに忙しく動きまわる世である。以前書いたことであるが、一九六五年に大学を終えてさて就職するかとなつた時私は院生となつて勉強を続けることにした。その年に大学に電子計算機が入つたので使つてみなさいと言われて、理学部によく通つて計算してもらつた。上京してから仕事上計算ばかりしていた思いがあり、電算機アレンギーと言われるものはなかつた。これが幸か不幸か今につながつて、電算機は冷蔵庫並みの大きさからどんどん小さくなり今はパソコンとかスマホと呼ばれる手に乗る道具になつて、そこから得られる情報たるやWorld Wide Webと名付けられているように世界規模なのです。BSでのワールドニュースでも、世界の街を歩くでも、恰も自分が歩いているように見せてくれる。そのせいか西洋に行つて見たいと思わなくなつ

た。以上が本誌をウェブ化したことのコメントです。次に、本誌の構成の事です。俳句、選句、選評は以前と同様に三本柱として維持しています。本句会の会員が自然減少にあること、並びにお便り広場を大事にしてきたことから、どこかの結社がやつていてるように、俳文欄を設けて、俳文も掲載することにしました。従つて、俳句・選句・選評 & 俳文の四本柱を本誌の構成にします。無論お便り広場は生活の季語に通じるのでこのまま続けます。今年はあの東北の大地震から十五年目になります。本誌も十五年目になります。五年ごとに記念号を刊行していましたので、今から十五周年記念号の準備にかかります。連絡の付く方に投稿をお願いするつもりです。月々の会報を五年ごとにまとめて分冊にして製本しようとも考えていました。今年の夏までには完成させるつもりです。以上で後記にてお伝えすることは全部書きました。

白金葭一月号（通巻171号）誌代一部千五百円（年会費一万五千円）
郵便振込口座一〇五二〇一四二一三六一
年一月18日発行編集発行人光成高志発行所〒270-1119我孫子市南新木
2-14-17光成方投句先・メール又はライン
印刷製本・喜怒哀樂書房〒950-0801新潟市東区津島屋七二九。表紙の題字は嘉悦羊三
&白金葭&版画賀状&新年の俳句六句&私・みちの初写真&尉鶴&璃子さんの句集「穴まどひ」よりの選句。